マリヴロンと少女

宮沢賢治

城あとのおおばこの実は結び、赤つめ草の花は枯(か)れて焦茶色(こげちゃいろ)になって、畑の粟(あわ)は刈(か)りとられ、畑のすみから一寸(ちょっと)顔を出した野鼠(のねずみ)はびっくりしたように又(また)急いで穴の中へひっこむ。

崖(がけ)やほりには、まばゆい銀のすすきの穂(ほ)が、いちめん風に波立っている。

その城あとのまん中の、小さな四(し)っ角(かく)山の上に、めくらぶどうのやぶがあってその実がすっかり熟している。

ひとりの少女が楽譜(がくふ)をもってためいきしながら藪(やぶ)のそばの草にすわる。

かすかなかすかな日照り雨が降って、草はきらきら光り、向うの山は暗くなる。

そのありなしの日照りの雨が霽(は)れたので、草はあらたにきらきら光り、向うの山は明るくなって、少女はまぶしくおもてを伏(ふ)せる。

そっちの方から、もずが、まるで音譜をばらばらにしてふりまいたように飛んで来て、みんな一度に、銀のすすきの穂にとまる。

めくらぶどうの藪からはきれいな雫(しずく)がぽたぽた落ちる。

かすかなけはいが藪のかげからのぼってくる。今夜

市庁のホールでうたうマリヴロン女史がライラックいろのもすそをひいてみんなをのがれて来たのである。いま、そのうしろ、東の灰色の山脈の上を、つめたい風がふっと通って、大きな虹が、明るい夢の橋のようにやさしく空にあらわれる。

少女は楽譜をもったまま化石のようにすわってしまう。マリヴロンはここにも人の居たことをむしろ意外におもいながらわずかにまなこに会釈してしばらく虹のそらを見る。

そうだ。今日こそ、ただの一言でも天の才ありうるわしく尊敬されるこの人とことばをかわしたい、丘の

小さなぶどうの木が、よぞらに燃えるほのおより、もっとあかるく、もっとかなしいおもいをば、はるかの美しい虹に捧（ささ）げると、ただこれだけを伝えたい、それからならば、それからならば、あの……〔以下数行分空白〕

「マリヴロン先生。どうか、わたくしの尊敬をお受けくださいませ。わたくしはあすアフリカへ行く牧師の娘（むすめ）でございます。」

　少女は、ふだんの透（す）きとおる声もどこかへ行って、しわがれた声を風に半分とられながら叫（さけ）ぶ。

マリヴロンは、うっとり西の碧（あお）いそらをながめていた大きな碧い瞳（ひとみ）を、そっちへ向けてすばやく楽譜に記された少女の名前を見てとった。

「何かご用でいらっしゃいますか。あなたはギルダさんでしょう。」

少女のギルダは、まるでぶなの木の葉のようにプリプリふるえて輝（かがや）いて、いきがせわしくて思うように物が云（い）えない。

「先生どうか私のこころからうやまいを受けとって下さい。」

マリヴロンはかすかにといきしたので、その胸の黄

や菫の宝石は一つずつ声をあげるように輝きました。
そして云う。
「うやまいを受けることは、あなたもおなじです。なぜそんなに陰気な顔をなさるのですか。」
「私はもう死んでもいいのでございます。」
「どうしてそんなことを、仰っしゃるのです。あなたはまだまだお若いではありませんか。」
「いいえ。私の命なんか、なんでもないのでございます。あなたが、もし、もっと立派におなりになる為なら、私なんか、百ぺんでも死にます。」
「あなたこそそんなにお立派ではありませんか。あな

たは、立派なおしごとをあちらへ行ってなさるでしょう。それはわたくしなどよりははるかに高いしごとです。私などはそれはまことにたよりないのです。ほんの十分か十五分か声のひびきのあるうちのいのちです。」

「いいえ、ちがいます。ちがいます。先生はここの世界やみんなをもっときれいに立派になさるお方でございます。」

マリヴロンは思わず微笑（わら）いました。

「ええ、それをわたくしはのぞみます。けれどもそれはあなたはいよいよそうでしょう。正しく清くはたら

くひとはひとつの大きな芸術を時間のうしろにつくるのです。ごらんなさい。向うの青いそらのなかを一羽の鵠(こう)がとんで行きます。鳥はうしろにみなそのあとをもつのです。みんなはそれを見ないでしょうが、わたくしはそれを見るのです。おんなじようにわたくしどもはみなそのあとにひとつの世界をつくって来ます。それがあらゆる人々のいちばん高い芸術です。」

「けれども、あなたは、高く光のそらにかかります。すべて草や花や鳥は、みなあなたをほめて歌います。わたくしはたれにも知られず巨(おお)きな森のなかで朽(く)ちてしまうのです。」

「それはあなたも同じです。すべて私に来て、私をかがやかすものは、あなたをもきらめかします。私に与えられたすべてのほめことばは、そのままあなたに贈られます。」

「私を教えて下さい。私を連れて行ってつかって下さい。私はどんなことでもいたします。」

「いいえ私はどこへも行きません。いつでもあなたが考えるそこに居ります。すべてまことのひかりのなかに、いっしょにすんでいっしょにすすむ人人は、いつでもいっしょにいるのです。けれども、わたくしは、もう帰らなければなりません。お日様があまり遠くな

りました。もずが飛び立ちます。では。ごきげんよう。」

停車場の方で、鋭(するど)い笛(ふえ)がピーと鳴り、もずはみな、一ぺんに飛び立って、気違(きちが)いになったばらばらの楽譜のように、やかましく鳴きながら、東の方へ飛んで行く。

「先生。私をつれて行って下さい。どうか私を教えてください。」

うつくしくけだかいマリヴロンはかすかにわらったようにも見えた。また当惑(とうわく)してかしらをふったようにも見えた。

そしてあたりはくらくなり空だけ銀の光を増せば、あんまり、もずがやかましいので、しまいのひばりも仕方なく、もいちど空へのぼって行って、少うしばかり調子はずれの歌をうたった。

底本：「新編　銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社
　　１９８９（平成元）年６月15日発行
　　１９９４（平成６）年６月５日13刷
入力：土屋隆
校正：noriko saito
２００５年１月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。